

高齢者のインターネット利用に対するリスク認知の特徴¹

——若年者との比較——

佐藤 広 英（信州大学）

太幡 直 也（愛知学院大学）

Characteristics of risk perception to Internet use for older adults

Hirotsune Sato (Shinshu University)

Naoya Tabata (Aichi Gakuin University)

要 旨

本研究の目的は、高齢者がインターネット利用に対してどのようなリスク、ベネフィットを認知しているのか、その具体的な内容を若年者との比較を通して検討することであった。高齢者および若年者を対象とする半構造化面接の結果、高齢者は若年者よりも詐欺被害に遭うリスクやウイルスに感染するリスクを認知していること、ネット自体に対する不安・恐怖を認知していること、インターネット上でのコミュニケーションに関するリスクをあまり認知していないことが示された。ベネフィット認知については、高齢者、若年者を問わず、情報収集の容易さや速さに対してベネフィットを認知していることが示された。その他、高齢者、若年者それぞれのインターネットの利用目的に対応したリスクやベネフィットが多く認知されることが明らかになった。

キーワード：インターネット、高齢者、リスク認知、ベネフィット認知

問 題

国立社会保障・人口問題研究所（2012）の推計によれば、日本における高齢化率（人口に対する65歳以上の割合）は、2025年に約30%、2060年に約40%に達するとみられており、超高齢社会に突入している。超高齢化が進む中、高齢者のインターネット（以下、ネット）に対する利用状況に変化がみられている。総務省（2016）の通信利用動向調査によると、2015年末時点でのネット利用率は、60代で76.6%、70代で53.5%となっており、2011年末時点と比較すると共に10%以上増加している。また、情報端末保有率をみると、60代の53.2%、70代の32.5%がパソコンを、60代の89.1%、70代の67.4%が携帯電話またはスマートフォンを保有している（総務省、2016）。さらに、利用頻度をみると、60代の57.3%、70代の48.0%が毎日少なくとも1回はネットを利用している（総務省、2016）。また、ネットの利用目的

をみると、60代以上では「電子メールの送受信」が70%を超え、次いで「地図・交通情報の提供サービス」「天気予報の利用」といったウェブでの情報収集が50%を超える（総務省、2016）。「金融取引」については、60代以上では10%強ではあるが、20代よりも割合が高くなっている。近年、若年者において普及しているソーシャル・ネットワーキング・サービス（以下、SNS）についても、高齢者の利用が増えてきており、2015年末時点で60代の22.5%、70代の17.2%が利用している（総務省、2016）。超高齢社会において、ネットの積極的な利活用は、高齢者の活動や生活シーンに変革をもたらし、活力を引き出すエンジンとなると考えられている（総務省、2013）ことから、今後、高齢者のネット利用はますます広がりを見せていくと考えられる。

高齢者のネット利用が増加する中、高齢者のネットトラブル被害も増加している。消費者庁（2016）によると、高齢者のネットトラブル被害は、他の世代と比較して少ないものの、年々増加傾向にあるとされる。特に、アダルト情報サイトやデジタルコンテンツ全般に関する相談において、高齢者の相談件数が増加しており、2015年度は相談件数が1万件を超えている（消費者庁、2016）。これらの相談の多くは、閲覧しているサイトにあるバナー広告やリンクから詐欺サイトへと誘導され、身に覚えのない高額料金の請求画面が表示されるといった架空請求・ワンクリック詐欺である。具体的には、「SNS からアダルト情報サイトへつながり会員登録された」、「SNS の広告からダイエットサプリメントを試しに注文したところ、定期購入となっていた」といった内容が挙げられる（消費者庁、2016）。また、電子商取引に関しても、全体に占める割合は小さいものの高齢者の相談は増加傾向にあり、2015年度は相談件数が1万件を超えている（消費者庁、2016）。

このような高齢者のネットトラブル被害の増加の背景には、高齢者のネットに対する知識の不足やリスク認知の不足があると考えられる。内閣府（2009）によるネット上の安全確保に対する世論調査によると、ネットを利用することに不安があるかという問いに対して、高齢者は他の世代と比較して「わからない」という回答が多いとされる。したがって、ネットにどのようなリスクがあるのかを知らない、分からない者が多いと考えられる。また、工藤（2011）によると、高齢者は自らの方法でネットの操作を会得しているが、リスク面についての知識や対応については学習する機会が少ないとされる。高齢者においてはネット利用に対するリスクを十分に認知していないことが、ネットトラブル被害を誘発していると想定される。実際に、佐藤・太幡（2016）は、高校生を対象とした調査において、SNS に対してリスクを認知していない者ほど、プライバシー侵害などのネットトラブル被害経験を有する割合が多いことを示している。

高齢者はネットに対する知識やリスク認知が不足していることが報告されている一方、若年者よりもコンピュータに対する不安が高いことも指摘されている。例えば、Laguna & Babcock（1997）は、高齢者において若年者よりもコンピュータ利用に対する不安が高いことを示している。また、Czaja & Sharit（1998）は、高齢者において他の世代よりもコンピュータに対する不安が高く、コンピュータに対する自己効力感（人がある事態に対処する際、それをどの程度効果的に処理できると考えられているかという期待・自信；Bandura, 1977）が低いことを明らかにしている。

以上の研究から、高齢者は他の世代と比較してネット利用に対するリスクをあまり認知し

ていない一方で、ネット利用に対して不安を感じていることから、何らかのリスクを認知している可能性も考えられる。しかし、従来の研究では、高齢者が何に対してリスクを認知しているのかといった、リスク認知の具体的内容を扱ったものはみられない。

そこで、本研究では、高齢者がネット利用に対してどのようなリスクを認知しているのか、その具体的内容を探るため、普段ネットを利用する高齢者を対象とする半構造化面接により検討する。また、リスク認知に関する研究（土田，2000）を踏まえ、リスク認知と対となるものとして、ネット利用に対してどのような便利さ（ベネフィット）を感じているかというベネフィット認知についても併せて検討する。そして、比較対象として若年者（本研究では大学生）に着目し、高齢者とのリスク認知やベネフィット認知の具体的内容の違いを検討する。本研究において、高齢者のリスク認知の具体的内容を明らかにすることで、高齢者の安全なネット利用に対する示唆が得られると考えられる。

方 法

調査対象者および調査時期

高齢者については、松本地域シルバー人材センターの登録者のうち、普段ネットを利用している60歳以上の高齢者20名（男性12名、女性8名、平均年齢 67.25 ± 3.79 歳）に対して、2016年1月に松本地域シルバー人材センター内で半構造化面接を実施した。面接は第一著者（男性、35歳）と大学生2名（男性1名、女性1名、共に22歳）が行った。面接の進め方が同じになるように、面接者には事前に練習を行った。世界保健機関（WHO）の定義に基づく、高齢者は65歳以上と定義されるが、松本地域シルバー人材センターの登録者から対象者を抽出することが困難であったため、60～64歳も調査対象として含めた。

若年者については、大学生18名（男性9名、女性9名、平均年齢 20.50 ± 1.01 歳）に対して、2015年7月に半構造化面接を実施した。面接は大学生9名（男性1名、女性8名、19～21歳）が一人あたり二名ずつ行った。面接の進め方が同じになるように、面接者には事前に練習を行った。

調査内容

面接では、最初に、性別、年齢、居住構成、普段のネット利用状況、ネットに関する教育経験の有無を尋ねた。そして、ネットのリスク認知（“ネットのどのような点が危険だと思いますか”）、ネットのベネフィット認知（“ネットのどのような点が便利だと思いますか”）について、自由に回答するよう求めた²。面接開始前に、調査対象者の許可を得て、面接中の発言内容をICレコーダーにより録音した。面接は1回あたり25～30分であった。

データの処理

面接での発言内容について、録音データからトランスクリプトを作成した。そして、ネットのリスク認知およびベネフィット認知に関する内容を抽出した。高齢者と若年者の発言内容を合わせて、第一著者（男性、35歳）と大学生1名（女性、21歳）が内容の類似性を基にカテゴリー分類を行った。その結果、ネットのリスク認知は10カテゴリー、ネットのベネフィット認知は9カテゴリーに分類された。一致率はリスク認知が96.4%、ベネフィット認知が98.2%であった。一致しなかった発言内容については、分類を行った2名の合議の下で

カテゴリーを決定した。

さらに、発言内容についてテキストマイニングを行うため、KH コーダー（樋口，2014）を用いて表記揺れの確認および修正，分ち書きの誤りの修正を行った。

結果と考察

ネットのリスク認知の分類

ネットのリスク認知に関する内容は合計112個（高齢者： $M = 2.50$, $SD = 1.48$, 若年者： $M = 3.44$, $SD = 1.42$ ）が収集された。 t 検定の結果、高齢者の方が若年者よりもネットのリスク認知の内容の個数は有意に少なかった（ $t(36) = 2.37$, $p < .05$ ）。したがって、高齢者は若年者よりもネットに対するリスクをあまり認知していないと考えられる。

カテゴリー分類の結果、ネットのリスク認知は、「依存の危険性」「ウイルス感染の危険性」「個人情報流出への不安」「詐欺被害への不安」「情報の信憑性」「操作・利用への不安」「匿名性の危険性」「ネット自体への不安」「ネットショッピングへの不安」「発信することへの不安」の10カテゴリーに分類された。各カテゴリーの発言内容の例と高齢者、若年者における言及率を Table 1 に示した。

高齢者においては「詐欺被害への不安」を言及する割合が最も高く、次いで「ウイルス感染の危険性」を言及する割合が高かった。比率の差の検定の結果（Table 1）、高齢者は若年者よりも「ウイルス感染の危険性」（ $z = 2.07$, $p < .05$ ）、「詐欺被害への不安」（ $z = 2.88$, $p < .01$ ）、「操作・利用への不安」（ $z = 2.37$, $p < .05$ ）、「ネット自体への不安」（ $z = 2.91$, $p < .01$ ）を言及する割合が有意に高く、「匿名性の危険性」（ $z = 2.39$, $p < .05$ ）を言及する割合が有意に低く、「発信することへの不安」（ $z = 1.77$, $p < .10$ ）を言及する割合が低い傾向にあった。

「詐欺被害への不安」について、高齢者において若年者よりも言及される割合が高かった理由としては、近年、高齢者を狙った消費者トラブル、詐欺被害が増加している（消費者庁，2013）ことが挙げられる。また、「操作・利用への不安」「ネット自体への不安」を言及する者が多かった背景には、高齢者のネット利用に対する自己効力感の低さがあると考えられる。高齢者は若年者よりもネット利用が少なく（総務省，2016）、コンピュータに対する不安が高く（Laguna & Babcock, 1997）、コンピュータに対する自己効力感が低いとされている（Czaja, & Sharit, 1998）。こうした高齢者における自己効力感の低さが、操作・利用への不安、ネット自体への不安として現れたと考えられる。

また、「ウイルス感染の危険性」について、高齢者において若年者よりも言及する割合が高かった理由としては、高齢者のネット利用目的の多くがメール利用である（総務省，2016）ことが反映されたと考えられる。また、「ウイルス感染の危険性」に関する高齢者の回答では、『ネットやメールはウイルスを植え付けやすいということで、あまり使わない』といった回答が多くみられた。このことから、ネット自体への不安を背景として、ウイルス感染に対するリスクを認知する者が多かったと考えられる。

一方、「匿名性の危険性」「発信することへの不安」について、高齢者において若年者よりも言及する割合が少なかった理由としては、ネットでのコミュニケーションに関わるリスク

であることが反映されたためと考えられる。高齢者の SNS 利用は20%程度と報告されており（総務省，2016），若年者と比較して，不特定多数とのコミュニケーション目的でのネット利用が比較的少ないと考えられる。そのため，高齢者はネット上でコミュニケーションを行う際にどのようなリスクがあるのかを認知していない者が多い可能性が考えられる。

Table 1 リスク認知のカテゴリー名，発言内容の例と言及率（%）

カテゴリー名	発言内容の例	高齢者 (<i>n</i> = 20)	若年者 (<i>n</i> = 18)	<i>z</i> -value
依存の危険性	ネットにはまってしまう	10.0	16.7	0.47
ウイルス感染の危険性	利用するとウイルスにかかる	45.0	16.7	2.07 *
個人情報流出への不安	個人情報が漏洩してしまう	40.0	61.1	0.94
詐欺被害への不安	架空請求や出会い系で騙されそう	65.0	22.2	2.88 **
情報の信憑性	誤った情報がたくさんある	20.0	33.3	0.73
操作・利用への不安	操作をミスするとおかしなことになる	35.0	5.6	2.37 *
匿名性の危険性	匿名で悪口を書いたりする	0.0	27.8	2.39 *
ネット自体への不安	知らないことが多すぎる，虚構の世界	35.0	0.0	2.91 **
ネットショッピングへの不安	ネットでの買い物は詐欺にあうかもしれない	35.0	27.8	0.69
発信することへの不安	SNS で炎上するのが怖い	5.0	27.8	1.77 +

+ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$.

ネットのリスク認知のテキストマイニング

ネットのリスク認知に関するトランスクリプトを基に，KH コーダーを用いてテキストマイニングを行った。分析に用いた品詞は，名詞（サ変名詞を含む），形容動詞，ナイ形容，副詞可能，未知語，動詞，形容詞であった。高齢者，若年者ごとの頻出語（上位20語）を Table 2 に示した。頻出語のうち，「メール」「子供」「詐欺」「セキュリティ」という語が高齢者においてのみ挙げられていた。

次に，高齢者，若年者とネットのリスク認知に関する語との対応分析を行った（Figure 1）³。なお，語の出現数は12～50語に設定した。Figure 1 より，高齢者に特徴的な語として，「詐欺」「セキュリティ」といった語が挙げられる。これらは，リスク認知の分類における「詐欺被害への不安」，「ウイルス感染の危険性」が高齢者において多く言及されたという結果と一致しており，高齢者を狙った詐欺被害の増加（消費者庁，2013）や高齢者のネット利用目的の多くがメール利用である（総務省，2016）という事実を反映していると考えられる。

また，高齢者に特徴的な語として，「分かる」という語が挙げられる。この語は，主に「分からない（分かる+ない）」として用いられており，ネットの世界や使い方が分からないといった文脈で用いられていた。具体的には，「ネットの使い方が分からない」，「自分には使いこなせない」といった内容であり，リスク認知の分類において「操作・利用への不安」「ネット自体への不安」が高齢者に多く言及されたという結果と一致している。高齢者における自己効力感の低さ（Czaja, & Sharit, 1998）が，ネットの世界や使い方が分からないという語として現れたと考えられる。

また，若年者に特徴的な語としては，「Twitter」「友達」「個人情報」といった語が挙げられる。これらの語は，SNS でのコミュニケーションおよびそれに付随するプライバシー侵

害への不安に関わる語であると考えられる。若年者は高齢者よりも SNS などコミュニケーション目的のネット利用が多いこと（総務省，2016）が反映された結果であると考えられる。

以上のように，高齢者と若年者共に，それぞれのネット利用目的を反映したリスクが挙げられているといえる。

Table 2 高齢者，若年者ごとのリスク認知の頻出語（上位20語）

高齢者			若年者		
抽出語	品詞	出現回数	抽出語	品詞	出現回数
思う	動詞	57	思う	動詞	38
人	名詞	41	自分	名詞	24
ネット	名詞	36	使う	動詞	21
自分	名詞	36	ネット	名詞	18
使う	動詞	34	見る	動詞	18
分かる	動詞	30	不安	形容動詞	18
入る	動詞	29	情報	名詞	17
言う	動詞	23	人	名詞	16
情報	名詞	21	怖い	形容詞	16
怖い	形容詞	21	Twitter	未知語	14
見る	動詞	20	個人情報	名詞	14
出来る	動詞	19	出来る	動詞	10
メール	名詞	18	あまり	副詞	9
出る	動詞	18	友達	名詞	9
ウイルス	名詞	16	感じる	動詞	8
子供	名詞	16	言う	動詞	8
パソコン	名詞	15	相手	名詞	8
詐欺	名詞	15	Facebook	未知語	7
セキュリティ	名詞	13	ウイルス	名詞	7
多い	形容詞	13	サイト	名詞	7

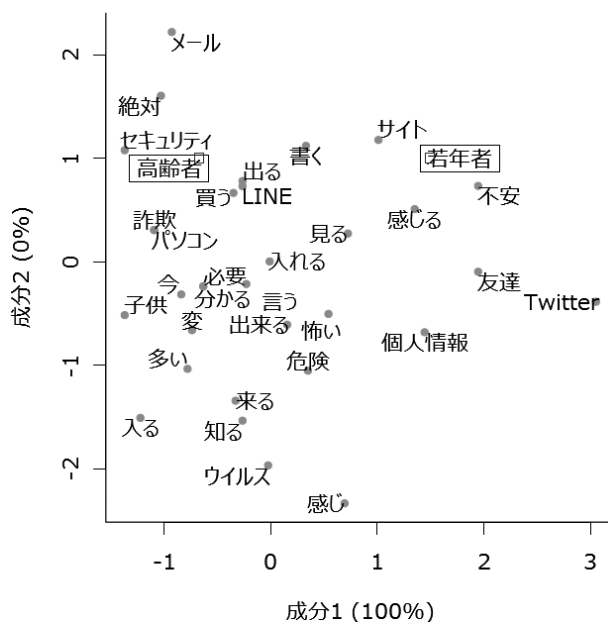


Figure 1. 高齢者，若年者とリスク認知に関する語との対応分析

ネットのベネフィット認知の内容の分類

ネットのベネフィット認知に関する内容は合計112個（高齢者： $M = 2.95$, $SD = 1.11$, 若年者： $M = 2.94$, $SD = 1.05$ ）が収集された。 t 検定の結果、高齢者と若年者の間で、ネットのベネフィット認知の内容の個数に差はみられなかった。（ $t(36) = 0.03$, $n.s.$ ）。したがって、ベネフィット認知については、高齢者と若年者において同程度であると考えられる。

カテゴリー分類の結果、ベネフィット認知は、「機能的利便性」「コミュニケーション」「娯楽」「情報収集全般」「即時の情報収集」「ネットショッピング」「場所を問わない」「時間を問わない」「多様な視点」の9カテゴリーに分類された。各カテゴリーの発言内容の例と高齢者、若年者における言及率を Table 3 に示した。

高齢者、若年者に共通して、「情報収集全般」を言及する割合が最も多く、次いで「即時の情報収集」「コミュニケーション」が多かった。このことから、年齢層に関わらず、情報収集やコミュニケーションという点においてネットのベネフィットを認知していると考えられる。比率の差の検定の結果、高齢者は若年者よりも「場所を問わない」（ $z = 1.92$, $p < .10$ ）、「時間を問わない」（ $z = 1.90$, $p < .10$ ）を言及する割合が低い傾向にあった。「場所を問わない」「時間を問わない」というカテゴリーには、「深夜でも使うことができる」「家から出なくても調べられる」「携帯があれば十分なんでもできる」といった回答が含まれており、若年者の学業や生活様式に対応した内容が多く言及されたと考えられる。また、高齢者は若年者よりも SNS などコミュニケーション目的のネット利用が少ない（総務省, 2016）ことから、時間や場所を問わずにコミュニケーションできるという点に対してベネフィットを感じにくかったと考えられる。

Table 3 ベネフィット認知のカテゴリー名、発言内容の例と言及率（%）

カテゴリー名	発言内容の例	高齢者 ($n = 20$)	若年者 ($n = 18$)	z -value
機能的利便性	銀行取引ができる, 確定申告ができる	25.0	5.6	1.64
コミュニケーション	子供と連絡がとりやすい	35.0	38.9	0.25
娯楽	動画や映画をみることができる	10.0	5.6	0.51
情報収集全般	検索で何でも調べることができる	80.0	88.9	0.75
即時の情報収集	瞬時に情報をみつけることができる	50.0	44.4	0.34
ネットショッピング	足を運ばずにショッピングできる	20.0	38.9	1.28
場所を問わない	家でなんでもできる	5.0	27.8	1.92 ⁺
時間を問わない	いつでも利用できる	0.0	16.7	1.90 ⁺
多様な視点	多様な意見に触れることができる	10.0	0.0	1.38

⁺ $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$.

ネットのベネフィット認知のテキストマイニング

リスク認知と同様の分析を行った。高齢者、若年者ごとの頻出語（上位20語）を Table 4 に示した。頻出語のうち、「情報」「調べる」「見れる」「検索」という語が高齢者、若年者を問わず多くみられており、ネットのベネフィットとして情報収集が多く挙げられていた。

次に、高齢者、若年者とネットのベネフィット認知に関する語との対応分析を行った（Figure 2）。なお、語の出現数は5～50語に設定した。Figure 2より、高齢者に特徴的な語として、「メール」「銀行」「ニュース」といった語が挙げられる。「メール」については、リ

スク認知と同様、高齢者のネット利用目的の多くがメール利用である（総務省，2016）という事実を反映していると考えられる。また、「銀行」についても、金融取引目的でのネット

Table 4 高齢者，若年者ごとのベネフィット認知の頻出語（上位20語）

高齢者			若年者		
抽出語	品詞	出現回数	抽出語	品詞	出現回数
見る	動詞	23	便利	形容動詞	26
出来る	動詞	20	出来る	動詞	19
ネット	名詞	18	思う	動詞	18
分かる	動詞	17	情報	名詞	18
思う	動詞	16	ネット	名詞	17
便利	形容動詞	15	調べる	動詞	15
情報	名詞	14	今	副詞可能	10
自分	名詞	11	出る	動詞	10
調べる	動詞	11	入る	動詞	10
見れる	動詞	8	手	名詞	9
人	名詞	8	人	名詞	9
全部	副詞可能	8	検索	名詞	8
メール	名詞	7	言う	動詞	8
検索	名詞	7	使う	動詞	8
使う	動詞	7	連絡	名詞	8
問題	ナイ形容	7	Google	未知語	7
言う	動詞	6	家	名詞	7
今	副詞可能	6	行く	動詞	7
ニュース	名詞	5	早い	形容詞	7
銀行	名詞	5	AI	未知語	6

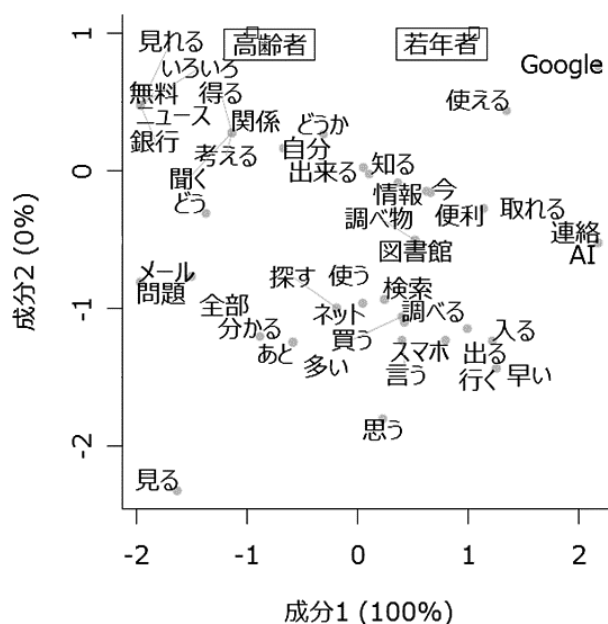


Figure 2. 高齢者，若年者とベネフィット認知に関する語との対応分析

利用が高齢者において若年者よりも多いこと（総務省，2016）が反映していると考えられる。さらに、「ニュース」については、高齢者、若年者を問わず情報収集がネットのベネフィットとして挙げられるものの、高齢者はニュースの閲覧、若年者では大学での課題の調べ物という目的の違いが反映された語であると考えられる。実際に、若年者に特徴的な語として、「図書館」や「調べ物」という語が挙げられる。

また、若年者に特徴的な語として、「連絡」「取れる」「早い」といった語が挙げられる。リスク認知と同様、ベネフィット認知においても、SNSでのコミュニケーションに関わる語が挙げられており、若年者においてコミュニケーション目的のネット利用が多いこと（総務省，2016）が反映された結果であると考えられる。

以上のように、高齢者と若年者共に、それぞれのネット利用目的を反映したベネフィットが挙げられているといえる。

本研究のまとめと今後の課題

本研究では、高齢者のネット利用に対するリスク認知およびベネフィット認知の具体的内容を明らかにするため、半構造化面接を実施した。そして、カテゴリー分類とテキストマイニングによる分析の結果、次の三点が明らかとなった。第一に、ネット利用に対するリスク認知について、高齢者は若年者よりも詐欺被害に遭うリスクやウイルスに感染するリスクを認知している者が多いこと、利用方法が分からずネット自体に対する不安・恐怖を感じている者が多いことが示された。第二に、ネット利用に対するベネフィット認知について、高齢者、若年者共に情報収集の容易さや速さに対してベネフィットを認知していることが示された。第三に、高齢者や若年者それぞれの利用目的に対応したリスクやベネフィットが多く認知されることが示された。

本研究の貢献として、高齢者がネット利用に対してどのような側面のリスクを認知しているか、どのような側面のリスクを認知していないかを明らかにした点が挙げられる。本研究で明らかとなった高齢者のリスク認知の特徴は以下の二つに整理される。第一に、高齢者は、詐欺被害やウイルス感染に対するリスクを認知しているが、ネット上でのコミュニケーションを行う際にどのようなリスクがあるのかを認知していない者が多いと考えられる。佐藤・日比野・吉田（2010）は、ネット上における匿名性は攻撃的言動を促進することを報告している。また、佐藤（2011）や佐藤・太幡（2016）では、ネット上においてプライバシーの低い者ほどプライバシー侵害や他者からの迷惑行為の被害経験を有する割合が多いことを示している。このように、匿名性やプライバシーについては、ネット上でのコミュニケーションにおけるリスクであり、ネットを安全に使用するには、それらの影響を十分に理解することが必要であると考えられる。第二に、高齢者は、ネット自体、ネットの操作・利用に対して不安を感じており、ネット利用に対する自己効力感の低さがネット利用自体を抑制していると考えられる。ネットショッピングや金融取引など、ネットは高齢者が在宅のままさまざまなサービスを受ける機会を提供するものであり、超高齢社会において非常に有益なツールである。そのため、高齢者のネット利用を促進するためには、ネット利用に対する不安・恐怖を取り除く必要があるだろう。コンピュータ利用の経験を積むことでコンピュータやネット利用に対する不安が低減し、自信の増加につながる事が指摘されている（Jay &

Willis, 1992) ことから、高齢者を対象としたコンピュータ教室の増加など、高齢者が安全にネットを利用できる環境を増やすことが重要であると考えられる。

最後に、今後の研究においては、高齢者のネット利用に対するリスク認知とネットトラブル被害経験との関連を量的調査によって検討する必要があると考えられる。本研究では、高齢者におけるネット利用に対するリスク認知の内容に焦点をあてたが、高齢者においてはネット利用に対してリスクをあまり認知していないことがネットトラブル被害につながると想定されるためである。高齢者のネット利用に対するリスク認知とネットトラブル被害経験との関連を詳細に検討することによって、高齢者の安全なネット利用に対するさらなる示唆を得ることができると考えられる。

引用文献

- Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- Czaja, S. J., & Sharit, J. (1998). Age differences in attitudes toward computers. *The Journal of Gerontology: Series B*, 53, 329-340.
- Grimes, G. A., Hough, M. G., Mazur, E., & Signorella, M. L. (2010). Older adults' knowledge of Internet hazards. *Educational Gerontology*, 36, 173-192.
- 樋口耕一 (2014). 社会調査のための計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して ナカニシヤ出版
- Jay, G. M., & Willis, S. L. (1992). Influence of direct computer experience on older adults' attitudes toward computers. *Journal of Gerontology*, 47, 250-257.
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2012). 日本の将来推計人口 (平成24年1月推計)
< <http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/newest04/gh2401.pdf> >
- 工藤奈保子 (2011). ICT 利用における高齢者のリスクの現状と課題：高齢者の認知・心理的特性・社会的特性を踏まえた一考察 21世紀デザイン研究, 10, 237-245.
- Laguna, K., & Babcock, R. L. (1997). Computer anxiety in young and older adults: Implications for human-computer interactions in older populations. *Computers in Human Behavior*, 13, 317-326.
- 内閣府 (2009). インターネット上の安全確保に関する世論調査
< <http://survey.gov-online.go.jp/h27/h27-net/gairyaku.pdf> >
- 佐藤広英 (2011). インターネット利用者のプライバシー意識に関する研究 社会安全研究財団若手研究助成最終報告書.
- 佐藤広英・日比野桂・吉田富二雄 (2010). CMC (computer-mediated communication) が攻撃性に及ぼす効果 筑波大学心理学研究, 39, 35-43.
- 佐藤広英・太幡直也 (2016). 情報プライバシーに基づく SNS 利用者の類型化：プライバシーに関わる被害経験および自己情報公開に対するリスク認知との関連 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 15-26.
- 消費者庁 (2016). 平成28年度版消費者白書
< http://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer_research/white_paper/pdf/28hakusho_all.pdf >
- 総務省 (2013). 平成25年度版情報通信白書 (第3節超高齢化社会における ICT 活用の在り方)
< <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h25/pdf/n2300000.pdf> >

総務省 (2016). 平成27年通信利用動向調査

< http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/data/160722_1.pdf >

土田昭司 (2000). 日本におけるゼロ・リスク認知：研究の試み 関西大学社会学部紀要, 31, 257-279.

(2017年11月6日受理, 11月21日掲載承認)

¹ 本研究は公益財団法人日工組社会安全財団若手研究助成 (2015年度) を受けた。また、本研究の一部は、日本社会心理学会第57回大会 (関西学院大学) において発表された。

² プライバシーに対する考え方 (“ネットでの個人情報の公開・流出に対して、どのような点に気をつけていますか”), ネットトラブル被害経験 (“ネットトラブルの被害に遭われた経験はありますか”) についても尋ねたが、本研究では割愛する。

³ 高齢者、若年者は二値変数であるため、図中の左に布置するものほど高齢者に特徴的な語、右に布置するものほど若年者に特徴的な語であると解釈することができる。Figure 2 についても同様である。

